

以下 汚れあり

破損あり



○世能考迹

○八津木下居考

○世能考塚

○南朝

○筆隨意

○二郡祭事記

○其外

○信達歌考抄

○温雜

○乱

○和歌職原鈔

○永慶軍記狂歌

○其外

推葉

世々流跡

菅江真澄誌

○高清水園と云事
 續紀十卷云天平五年二月巳未出羽柵遷置秋田村高清水園又
 於雄勝村建郡居民焉云也見多於秋田村云今秋田郡
 率酒^名在寺内云其地^名秋田村也雄勝村^名郡^名
 給^事あり^事世々^事本^事の^事白^事影^事記^事不^事流^事跡^事考^事つ^事れ^事世^事々^事精^事く^事

○白般名須波の事
 三代實錄十卷亦貞觀十二年八月廿八日授參河國正五位下智立神
 破鹿神並正五位上從五位上狹投神正五位下出羽國白般名神
 須波神並從五位下云々見^事三河國智立神^事今^事の^事池^事鯉^事鮒^事驛^事
 座^事僅^事人^事像^事投^事神^事前^事宮^事中^事宇^事避^事蛇^事の^事守^事北^事出^事社^事破^事鹿^事神^事本^事宮^事山^事と^事大^事貴^事向^事不^事廢^事

今の事あり

地未社、阿羅行經社、佐長邊邊寺社、社神、古くは、阿羅行經社、佐長邊邊寺社、社神、古くは、阿羅行經社、佐長邊邊寺社、社神、古くは、阿羅行經社、佐長邊邊寺社、社神、

 佐幸宜、大録の名、鷹、太白雄、命、白雄、命、日、徳、徳、徳、の、兄、の、御、神、昔、の、阿、伊、

 出羽神、昔、の、阿、伊、

 志、事、昔、の、阿、伊、

 本郡常盤村近、未、代、川、岸、に、白、岩、社、神、様、を、奉、り、

 又、白、岩、社、神、様、を、奉、り、

 秋田郡阿仁道城邑、備、謙、社、神、様、を、奉、り、

 本郡百崎村、縣、の、宮、田、山、首、詣、社、神、様、を、奉、り、

 神、社、神、様、を、奉、り、

 神、社、神、様、を、奉、り、

 神、社、神、様、を、奉、り、

志、事、
 本郡常盤村近、未、代、川、岸、に、白、岩、社、
 又、白、岩、社、
 秋田郡阿仁道城邑、備、謙、社、
 本郡百崎村、縣、の、宮、田、山、首、詣、社、
 神、社、
 神、社、
 神、社、

世々けるる都

とくし市社つり

菅江貞澄 誌

出羽國雄勝郡東島海、西の島海山、

山、

 奥國と守護、給、

 神の舊、給、

給、

 上卷、天、平、五、年、十、月、已、未、出、羽、柵、

 又於、天、平、五、年、十、月、已、未、出、羽、柵、

 月も、天、平、五、年、十、月、已、未、出、羽、柵、

 の、天、平、五、年、十、月、已、未、出、羽、柵、

寶曆元年辛未夏四月の中旬あるむら峯に長床作らる
 少く白塚のニツカをびたることありてむとせしめなきありしが
 大なる骨極り出るわらきくゆき如ふ埋むるや國
 伝て今十世當住僧宥香坊の物語これなりこちの塚は
 こせめあやこちのやまのことなる事ふ助形根沖の縁起り
 見えり此山はとく舊跡跡を此山の北方の中て大室山ありそや
 大室長峯よりいかに家もあまあり地と思はれて陶師などの
 破れさるらまの地りごとく北大室根と刻れそやちの天室の
 驛の舊跡ありんかやうくの地帯ありこちの龍やうて谷を山と
 化り山をせと化り川あり河を甲とあり畠とあり其名はまなを
 原世と多し續紀十二卷云天平七年辛未先是陸奥攝察使大
 野朝臣東人等言從陸奥國達出羽柵道經男勝行程

迂遠請征雄勝村以通直路於是 詔持節大使兵部卿從
 三位藤原朝臣麻呂副使正五位上佐伯宿禰豐人常陸守從五
 位上勳六等坂本朝臣宇頭麻呂等發遣陸奥國判官四人全典
 四人辛未年遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻呂等と云
 以去二月十九日到陸奥多賀柵鎮守將軍從四位上大野
 朝臣東人共奉章且追常陸上總下總武藏上野下野等六國
 騎兵一千人開山海兩道を將軍東人從多賀柵發を
 從部内色麻柵發即日に出羽國大室驛をと見えり
 大室をの世に驛路よりまをん今をふまらあ山中を
 けるもくひれとひも多かりけり

琴ヶ龍

あつ雄勝郡寺泊在浅敷村の邊なりと琴ヶ龍といふあり

そのなほ

踊りやと老翁の物語は其果に、
 強盗と多くあるものなるの
 強盗と多くあるものなるの
 強盗と多くあるものなるの
 強盗と多くあるものなるの
 強盗と多くあるものなるの
 強盗と多くあるものなるの
 強盗と多くあるものなるの
 強盗と多くあるものなるの

いざい塚

ちり、雄勝郡中村の枝郷、下榊山とあり、その古四王社
 あり、其兵庫唐社あり、兵庫丸といふ特長あり、むかし此郷
 菅兵庫頭某といふ人の養ひあり、特長、其の末肩より、さへ小
 人も追まかれ、屍の蔵とて運びぬ、そのころは、兵庫の
 堀あり、憲法師とて、そのころ、券を、其の角を、ひき取りぬ

券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、
 券を、角を、ひき取りぬ、其のころ、券を、其の角を、ひき取りぬ、

いざい塚

兵庫小と兵庫大とて世あるはるめをみよふこといふと
 ぬきかきあへりてとすれり夫の命をまふは
 くれしとにひりひりてあはれんをなすべし
 ことわらぬと兵庫大とこれにまりぬ兵庫小の家は
 年々さき礼をぬきかきあへりてとすれり夫の命を
 まふはぬきかきあへりてとすれり夫の命を
 神とす其物靴子と納めりてて評登比社をあはれ
 かくるしつじを古四王社ふつとすまはるるがを
 かくるしつじを

筆隨意一卷

菅江真澄 誌

久保田のいまじり祭

此秋田の正月の夜宵といふ集り高はにこそ板戸をとりあてて圓とわし
 三四間四方或五六間四方で七八間とわけて家を築き作らるる雪の屋
 といふおくりくひく引くたむむ如く夕日ましくいとさきまをりてその空
 俵を二百三百身、五百と敷の空俵をつらきり帯立注連をて突手親は
 祝餅撰茶の飾あり七鐘八大神と帷をさき佐喜長といふ旗や
 も其飾の式は毎日その空俵二ツの底小三尺をりの紐を付て三尺ある
 のあけられぬとてそれを清火とやけて丈夫筆をさき掃きとめりて舞
 家小甲子屋にて七六の十九歳までを家の例もさき舞をさきありとつ
 たりし木桶をさきやわくをさき舞一色といふさき舞のさきありとつ
 燃これとらんをさき雪ゆきき群をさき舞復たさき城内防の通路はさき

おてのり

止ぬこを他國より尺女ぬ行ひ左義長みそをんとあふさんといふとあひまひ
 信濃國ありて道祖神笑ふを門松と申して中道より火とけけ御勅
 令にて白茅の削掛の如き耳小指の事絶くともふれとまりとてこよ
 さふ神を呪ふといふをいふに似れども世出羽保田鎌倉似たりもあつし
 るはく火もやとゆもそそ其のありて祝言賜ひて明ぬの左義長の神
 貝吹といふ都て唱門子か金鼓といふをいひ唱門師を浴外の一村に在りたり
 まと言事記傳十二電神の條小電を諸民に炊聞焚事へ教へ賜ひて功
 あは神なりしを續紀天平三年正月神祇官奏延火御電四時祭
 祀永為常例大膳職式に御膳神八座高部神一座電神四座若神
 四座をいふも各其祭の料物品を載せ右祭春料依前件秋亦准世
 云とる電神は如世公家へ祭賜ひ又古より諸民に各祭しとも
 記文にもあはれし江波次第正月元旦四方拜條座人依小電神也

拜むともやまといふなり此小鎌倉を電座といふこれ庭電のこ
 小も鎌倉といふ地相模國の外も其名をこまに在り白田の字も
 山名とあり陸奥國の福岡に近き似島村ありの山澤の名も鎌倉といふ
 小ここの古なる電座のよれの地名小村十日道祖神といふ
 のとありまよせしり穂尺捧といふとれといふも持杖のよあり
 世事といふなり記されはこまのいふことなり

よみる稲花

秋田窪田は雄の城中小大八幡社とあり世社小仕へつと鶴子神とい
 代女祝しを古鎌倉鶴岡の神主の娘子八幡神影画といふ一軸と
 といふ竹童といふと殿とさつひもりてさあおのよまあり始
 といふともく女禰宜あり事自觀府小祢宜並置社者以女為社宜
 見え重なり宇佐八幡小古女禰宜ありと谷川士清は世事をいふなり

あつし

ゆてかみ

世に雷師^{カミ}のときう音はひしく恐^{ヒコシ}ゆてかみと云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ
 神^{カミ}の神^{カミ}と云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ
 魚^{イサ}の魚^{イサ}と云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ
 魚^{イサ}の魚^{イサ}と云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ
 魚^{イサ}の魚^{イサ}と云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ

ゆてかみ

秋田郡天^{テン}村^{ムラ}の湖水^{ウミ}を渡^{ワタ}る^{コト}は雄^{オス}瀧^{タキ}の橋^{ハシ}と云^ハ三^{サン}百^{ヒャク}間の板^{イタ}橋^{ハシ}有^{アル}
 遠^{トホ}江^エ國^{クニ}の瀧^{タキ}名^ナ橋^{ハシ}と云^ハと云^ハと云^ハ
 冬^{フユ}の冬^{フユ}に船^{フネ}の船^{フネ}と云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ
 魚^{イサ}の魚^{イサ}と云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ
 魚^{イサ}の魚^{イサ}と云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ
 魚^{イサ}の魚^{イサ}と云^ハ世に秋田^{アキタ}にて冬^{フユ}三雄^{サンユ}
 浦^{ウラ}の浦^{ウラ}に海^{ウミ}の魚^{イサ}を獲^トて群^{イサ}魚^{イサ}集^{イサ}と云^ハ

ありのほてりて海合の左右形をたへし左右のほてりて海不消く顔とてふや
 まま竹塹の瀉の底もさう竹塹とてた目と深く砂の中に入りそれを取ふ
 潮の引る跡の砂と鈍めて一へらひきつたありきる穴小鹽のれは砂上不消きあ
 ることありてさういふさうをえまひえまひえと深く掘りても再び
 出まらざれば目とほりて下守とていひまらさをもえらあまし人登りて
 小、よりひきし煙のまじりて切つても及我をまじりてとよる人も有りてあま
 のまじりて、後撰の歌、まじりてはくがさ面荒らりて顯昭と世説小物とて一
 卯焼くゆ人のまじりてさうみ、齋宮々御のほくさ小雀のつれつくりや草、
 今都と證せり潮と時瀉の兼くさるる、お行陸奥、か計小某まきま
 懸はゆる事と諸事とて、真字の意とて、舟敷の白魚の左右調左右村も
 づのれ説もあると、さうの初めのもさうえを左右調と左右形と左右
 村とてさうはくがさま、さうさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

○六郡祭事記

仙北郡部

七郡部 豊時老人後

○正月十日神宮寺、さう多細引

神職齋藤氏

仙北郡神宮寺の里、往還りさうさう先言、驛亭に神壇と
 佛幣と違つ十五日夜神人等笛鼓を北里にた橋の
 左の側り、神壇と借し、氏之内、一人等とた、さうさうは、
 さうさう舞とて、同夜經引あり、是とて、先、村、さうさうの、
 是、りて、牛、年、の、さう、と、唱、れ、家、毎、に、サ、一、把、と、出、さ、是、と、用、い
 大、繩、二、筋、と、調、し、お、し、て、驛、亭、へ、置、く、世、夜、神、職、幣、と、立、符
 終、と、世、繩、を、持、出、く、村、の、老、若、男、女、さう、あ、り、引、合、あ、り、上、り
 と、此、繩、を、下、り、を、雄、繩、と、し、真、中、へ、幣、吊、と、さ、さ、り、雌、繩
 切、事、あ、り、米、價、の、さう、さう、雄、繩、切、り、米、價、也、と、さう、さう、

同刈和野のこもや 市神宮 仙北郡光神宮寺堂不継く
野之神藏藤田氏串の幣帛之類之類の清き草に由る
左右専ら三本十二百より十五百まで加増祈念を是て村長
より有る里の市の中上中下三所(云々)を以て大細と申す
幣帛の所と正當と云ふ里に入る立しと云ふ所合し

三月音分泉里白山祭 世日神與宮回り申者人
言ふ其家定して是は注連と云ふは是傳三人大刀と撰て
出さるるを異事と云ふ

同古春渦巻天神宮 仙北郡南館小館里少所祓
鏡木氏世在丙多在大石小渦巻の文あり里合久く
渦巻の石は何事か事と云ふを以て小河の石と見ゆ也

と云認め及山多世文ありけり云々されいんを云々名原
にて近邊の境あり冬注日と云ふ

四月八日大倉山觀音祭 仙北郡北浦庄院内里子
在り別當修験金剛院之傳を里内より古より定むる家三戸
あり世傳是等登山して神與在り後南是より先三月音
別當修験登山して神與を供し北神國を普門品一卷を
書寫し世日山山石谷風石と云ふ(物)世山殺生禁断し

同日小杉山鎮守祭 仙北郡小杉山里少所伊持世等
白山明神二社之神祇熊谷氏より六倍と云古農家二戸
ありと云はる傳奉り神與巡り身世里に投り禁断し

唐松権現祭 仙北郡里少所別當修験光雲寺

安彦神（一）之六郡の事を遠方より女児を遣はす事

同日浮嶋神祭 仙北郡刈和野郡（一）別當田

修験三明法神祓儀因氏皆和彦神護所（一）神事御祭

町内石澤（一）家格（一）神與（一）

同日大威徳祭 仙北郡角籠花園里（一）在（一）世（一）祭

祭（一）と多（一）別當修験文藝院

六月吉日六軒神明祭 仙北郡六郎（一）多（一）在（一）神祓

山氏 同日角籠神祓祭 角籠惣（一）所（一）

鎮守之神祓鈴（一）木（一）

七月十七日廻野祭 仙北郡摘田路（一）別當修験

大寶院神與宮（一）總氏子供奉境内（一）利（一）力（一）

同日觀音祭 仙北郡強首里（一）在（一）別當修験山（一）寺（一）

宵祭日神與甘（一）字（一）了（一）獅子頭縛（一）の總氏子各燈籠（一）祀（一）

修（一）儀（一）

○同廿七日誦訪祭 仙北郡上（一）神（一）の總鎮守之神祓儀

氏（一）世時（一）神（一）酒（一）屋（一）寺（一）古（一）真（一）類（一）有（一）同（一）屋（一）奉（一）社

前の兩柱鯉（一）神（一）右（一）鯉（一）結（一）行（一）鯉（一）口（一）緒（一）和布（一）用（一）

信御（一）山（一）産（一）物（一）株（一）其（一）時（一）新（一）菜（一）世（一）寅（一）刻（一）清（一）後（一）神

町（一）之（一）知（一）刻（一）湯（一）立（一）地（一）集（一）屋（一）上（一）刻（一）神（一）與（一）由（一）孫（一）所（一）法（一）御（一）神

與（一）身（一）居（一）多（一）時（一）は（一）速（一）切（一）舞（一）有（一）は（一）速（一）と（一）仰（一）居（一）在（一）祈（一）願

と（一）本（一）を（一）造（一）り（一）舞（一）奉（一）信（一）言（一）世（一）祭（一）木（一）鐘（一）と（一）奉（一）

世（一）堂（一）小（一）南（一）誦（一）訪（一）と（一）社（一）神（一）祓（一）神（一）氏（一）同日祭（一）也（一）也（一）湯（一）之

神樂の外畧の事

○同日大曲 謝訪祭 仙北郡大曲 鎮守別當德盛
金剛院是前日小神楽町と傳る徳氏子供奉御柳
外と出也

○同日淀川 謝訪祭 仙北郡中川 鎮守別當
數子船 船解と云々 解更と云々を奉る

○八月 奉金作八幡神事 仙北郡金作 鎮守
神職三浦氏世頼借神楽の村の桑松舟之傳る睦丑
刻に湯立神樂此鎮坐の為に金作元何金作此町金作東
根金作共傳四村殺生禁斷と云々 又死人
葬らむ他村傳奉る

○同日 神宮寺八幡祭 仙北郡神宮寺 鎮守別當
直言花藏院 高良夜神樂所 白山宮 源也 奉
燈籠二百具 廿午刻 還奉行 籠一對 於對白
鳥毛 奉立 奉長刀 必龍長柄 十節子 十張 銃炮 十挺
練子 練八 澁水御正 懸大幣 獅子頭 笛鼓 銅柏子 六供
古より定也 奉立 奉立 奉奉也 昔幣 祝詞 神樂 白幡 八
流 流氏子 世奉 鋪 古幕下 再建造 宮奉行 提原 樂
時 棟札 奉立 存也

那珂通博 字公雅 號碧峰 福山國大倉官廩

東奥信達歌氣坤 東奥熊取高子先著 熊取右衛門權

田月盤谷先生註 延保筆治郎註 鑿錄著 天明七年十月廿九日

信達 信達郡 夷宕嶺夷宕也 信達 諸山伴侍自之 其小者

可宕 數人 其大者可宕 數十人 多者 壘石 居屋 覆以 大石

而成之 口皆南 御間 有 數座 出屋 以為 空屋 村南 白鬮 峰 亦

嘗 多有 之 由 石 工 塚 取 其 名 猶 有 之 存 昔 者 家 居 當 任 之 記

○ 濃川 沈末 濃川 山 明 崖 伴 侍 出 之 其 質 或 赤 或 黑 可 以 製 漆 也

○ 最勝 天王 寺 書 架 六 窓 障 皆 用 此 木 制 也

○ 最勝 天王 寺 障 子 亦 用 此 木 多 矣 藤 年 家 隆 御 目 肥 後

○ 詔 峰 在 音 備 小 坂 多 崎 崎 山 崎 崎 山 崎 崎 山 崎 崎 山 崎 崎 山

○ 條 塚 在 信 夫 郡 信 夫 郡 信 夫 郡 信 夫 郡 信 夫 郡 信 夫 郡

○ 私 語 橋 福 島 城 西 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

○ 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋 小 橋

阿津賀志山 在目田野而 阿津賀志或作有字櫻 一名白鹿峰

石那板 在赤杉村而許 幸鑑曰信夫佐藤莊司於其叔父

向志太郎高經伊賀長目七郎高重等陣于石那陽之上即是

斷取越 古所謂冠山後而今山後嶺也山嶺下乃長取村在

桑折驛北里餘亦見幸鑑

大鳥城 在信夫郡上飯阪村依藤

莊司元治古壘也

杉原 今福島也即古杉目太郎行信所居之處也

佐藤治莊司墓 在信夫郡佐藤野村即王事

國府臺 在信夫郡鎌田村宮城村之間今謂之鎌田臺宮城臺

宮城今誤作宮代

宮城村古碑 弘安元年建 有銘書 隨古雅辭則浮屠所

作有共趣情 四生念識 離苦得脫 同圓種智等語 尾有在

門尉源賴定敬白九字

信夫山古鐘 弘安二年所鑄有銘鄙俚不出

中野村古碑 弘安二年建 碑字剝蝕不可讀 唯有

年號可讀耳

小細木村古碑 建武元年建 碑面有建武元年

青海六字 半腹以下没于土中 非用入夫不可得

而觀之

永井川村古碑 永仁七年建 碑面有永仁七年七

月二字 亦剝蝕

下糠田村古碑 貞治六年二月三日建 亦剝蝕一字

不存可惜也 按北朝貞治六年當南朝正平二十

二年是時南朝將帥新田公楠公及義興等既戰死而

正儀存

信達歌考證附録

熊阪秀君實編著

熊阪守右衛門權兵衛男熊阪重徳印註

和歌職原鈔 貞享四年用板 朝言中納言暗事卿撰

聊原栞彦解大成本朝唐名考

四部 一官官 二次官 三判官 四典 四分

八省 ハツの省 二官 三神祇官 太政大臣

中務省 三の省 四の省 五の省 六の省 七の省 八の省

民部 九の省 十の省 十一の省 十二の省 十三の省 十四の省

國乃中圖帳 十五の省 十六の省 十七の省 十八の省

治部 十九の省 二十の省 二十一の省 二十二の省 二十三の省

刑部 二十四の省 二十五の省 二十六の省 二十七の省 二十八の省

宮内 二十九の省 三十の省 三十一の省 三十二の省 三十三の省

八省 三十四の省 三十五の省 三十六の省 三十七の省 三十八の省

中 中務省の略稱 ○中書 中務省、右名も
 卿 左名も ○大輔 次方、右名も
 少輔 次方、右名も ○兼 判官、右名も
 録 主典、右名も ○大舍人 大舍人寮、略し
 縫殿 右名も ○内近 右名も ○内膳 右名も
 内近 右名も ○内膳 右名も ○大學生 右名も
 天の御子 右名も ○大學生 右名も ○大學生 右名も
 飛鳥 飛鳥寮、右名も ○諸侯 諸侯寮、
 言 諸侯寮、右名も ○諸侯 諸侯寮、

みききれつる ○至計 右名も
 田租 田租寮、右名も ○至計 右名も
 木工 木工寮、右名も ○至計 右名も
 大炊 大炊寮、右名も ○至計 右名も
 御助 御助寮、右名も ○至計 右名も
 掃部 掃部寮、右名も ○至計 右名も
 兵部 兵部寮、右名も ○至計 右名も
 頭 頭寮、右名も ○至計 右名も
 因縁 因縁寮、右名も ○至計 右名も

正親 正親朝臣和訓之入 ありきんごとの氏を

内膳 入らりのりばてのつさ。忠雨 忠雨のつさ

世目も宮内省の禮者にて内を修るに職し酒を撰み
酒を造りしものも酒清酒を禮酒を一夜の
造りしものも酒清酒を禮酒を一夜の
酒を造りしものも酒清酒を禮酒を一夜の

采女 采女司と申して和訓也。東西常 東西常

親人のものも酒清酒を禮酒を一夜の

左馬 左馬のつさ

諸の司のよは者 正徳 正徳

右大臣 右大臣のつさ。内膳 内膳のつさ

中納言 中納言のつさ。内膳 内膳のつさ

少将 少将のつさ。内膳 内膳のつさ

左大臣 左大臣のつさ。内膳 内膳のつさ

彈正 彈正のつさ。内膳 内膳のつさ

助教 助教のつさ。内膳 内膳のつさ

満越 満越のつさ。内膳 内膳のつさ

大中原の事... 東中宮... 傳... 正一位

七冊

吉田定俊在判

貞享四年五月十日

羽陽... 柳左門... 同板

水雲筆記十卷... 鳥山北... 忠公... 頼朝... 領... 知行... 徒類... 理領... 孫... 由理... 四月九日... 同郡... 貞治二年... 於

三應仁

御廻りて往來の老若男女を利捕僅の身争ひ扶へられ徒ら田島を
荒果。旅寇の跡の三ヶ所ありけり昔は二百三百の民屋ありしを
も家二二残り多し名も在り在敷一室も勿きその三竹多
あれ山野の街も切し多し午時應仁元年小利て由理の民
も鐘の十青履の臣大田持資員七頼の邸を勿き事。新を
即十三人の地頭下玉し其く。十竹三原大和守重重書
仁加保小居候を大江大膳大夫義久と小住其外。赤尾保
子古。芥田折哉石川出雲守保朝川下村玉前等又由理忠八
郎維實。生官の時幼孫用子乳母が指さ出て出陣を忍び
養育月一ヶ三。四代守浪の身とありて在りし。今度新鎌倉
許状と様け由理の内。龍澤一ヶ所と賜。瀬原忠八郎と云ふ
此外信濃原民入郎等あり。根井式部少輔と云ふ。矢嶋義久
と云ふ。由理下りて矢嶋領内日居館と筑き住りけり。

○永徳軍記世七卷下。狂歌事と云ふあり。
世程西國も江戸下りし者物語も今度洛陽と宿也。京
童のちげ。江戸將軍連枝と云れし。其後。江戸下國給へ
諸人の知り候事と云ふ。又。將軍發句。

此の世も江戸の管め。と作けり。

仙其正宗勝を伝へり。

仙其正宗勝を伝へり。と云ふ。いそむ。いそむ。

西國者是と云ふ。官ふ。お。事。お。江戸下り。こと。語。が。い
些事。正宗使。お。是。と。お。を。思。東國。生れ
な。者。と。人。毎。お。事。お。大。閣。舌。吉。の。中。時
紹。巴。宗。匠。と。度。連。枝。有。し。小。東。國。の。者。當。將。軍。由。子
最。上。義。光。秋。田。城。介。實。子。も。連。枝。也。南。將。軍。御。父。子。の。事。
連。枝。も。お。上。年。に。お。り。お。也。世。の。も。能。と。り
公。と。お。也。と。云。お。事。と。或。去。後。と。植。と。り。お。の。と。り。里。も

之を云ふは東者を女打留り物と云ふ京言なりと云ふは
 彼後事と作りし語なりと云ふは正宗も然れけり後と云ふ
 言え御一矢なり給ふは風文に西國の武士是と云ふ御嘲也
 され御事難もこころと思ひつけし言ふは逐電を極ま
 正宗着年より六と云ふ道も長し風花雪月志傷められし
 事正宗の外舅義在城山形も千幸山と云ふ名ありその
 峯阿古屋に義在舊跡あり正宗十歳秋ア母支のしと云ふ
 徳子扶そ坊にちと云ふ阿古屋の松も徳子扶の月

義光返歌

是くも給ふは千幸山阿古屋の妻母不たふの月
 世日義光の妻室千産可し取揚りては娘を有るまあり不吉
 ありし世婚子名を身しと云れ時義光の妻姫が誕生日米津二部
 廢り千幸の名は世に傳へられし且に祝儀山形の名山形
 此娘千幸の前名附傳へられし義光聞かぬ其西言
 名を名首此女也信自任かて千幸の所はははは名山

祝給湯殿羽山御駒山と名つは給ふは外故おこすのめと
 云ふは義光姫が祝言小連勢也と云ふは僅れは山形連勢也
 成り者かりされは世に無下ありしと云ふは遠所也なりと云ふ
 今更の圓も不合若町人等の中より連勢師也と云ふは
 見し和歌の道に貴賤の權を分ちありしと云ふは其頃
 町奉行あり後藤掃部と云ふは町奉行と云ふは其頃
 云物と雖長月柄可なり物中んと云ふは其頃
 一同申出ける赤裡白裡はうき事と云ふは連裡二本も無之
 返答はいふ事と云ふは其頃と云ふは其頃
 共々正宗の數奇ありと云ふは善も悪も其頃と云ふは其頃
 て遂に祝儀の連勢を止て多々世姫無雙の美人と云ふは其頃
 の祝儀止も不吉こと正宗語を給ひしと云ふは其頃
 武蔵守の古飲物作也と云ふは其頃と云ふは其頃
 其頃也此女也其頃と云ふは其頃と云ふは其頃

此の山は正宗誅してふと作けし畏んやそ正宗

出るより入るの山を何地ぞ月手向たる我高野の原

將軍御感の心路のしとく又老年大崎一橋退治の後正宗誓願
一見せられし頃しも神世月の末つた木枯も身は立むるや
正宗狂歌也 昔岬やかき出んも身は立む錦も増れ

久少と云ふも正宗未嘗在城頃城下は般若坊と云ふ山伏
あり大峯能登羽馬山の中は勿論の荒行者修験道は役優
波塞塞其向山麓地は掛子入龍樹菩薩より胎藏界金剛
界の両部修行秘法相承せり後にも即身成佛の佛眼
を開きしは是れ客僧の正宗信持の証と云ふ少休の庵
立寄給ふ庭前も座蒲の麻看経巻見入さむそりけし信
やうなり般若坊は頭巾鉦懸を三層畏る徳と云ふ枝子
墨の玉葉去一本あり正宗取證しあり般若坊はさう信し
く氣色もさく畏りけし相懸と云ふなり

君をあらふ五葉とあれはさうや我世経のん世経の云

正宗堂りけしを区別也

心經の玉葉詞の下り般若坊一切公役を世後有り也
と堂のく般若坊手信の田地十貫の私知り玉を給りけし
或時此般若坊は負け一軒の中より火事出来けり既隣近焼
来り般若坊の家も危うし玉葉大に焼と云ふ事なり
及般若坊甲斐より金剛杖を夜して下知し打消終り類火
と通る玉葉の傳相懸なり

そのくは場本を焼来り般若坊棒を打ばむとあり
或もき正宗舊傳が出給ふと般若坊が庵玉葉のく玉葉手經之
と名うち賜り般若坊の敷を佛壇日拂と云ふ名を掛け置と云

握原と般若坊と二層の掛基は高きこと二層口

正宗よりけしを

般若坊玉葉と云ふ名を授けし何れも手かり也せし

又正宗、各積妻、歸降、道頭、座頭、一人有り、近習の者、も
殿御通、座頭、賜、去、し、多、座頭、少、も、多、を、村、
と、り、二王、も、大音、上、狂、狂、と、し、

正、宗、見、珍、ひ、已、座、頭、と、も、臆、も、狂、狂、と、み、
曲、奴、を、来、津、も、連、り、ま、り、扶、替、賜、り、し、不、敵、座、頭、を、
或、時、信、夫、の、つ、れ、致、し、ま、り、し、中、老、の、葉、を、
正、都、と、賜、り、是、を、名、と、し、

哀、れ、世、常、火、程、光、り、信、夫、の、里、代、居、と、名、を、ん
と、狂、狂、と、み、け、正、宗、と、致、し、ま、り、座、頭、を、狂、狂、と、正、宗
と、入、し、信、夫、と、信、者、を、名、と、し、

と、中、老、と、面、上、を、載、き、り、梅、を、地、黄、門、正、宗、を、名、を、し、事、
皇、祖、山、陽、も、十、代、伊、達、大、膳、大、夫、政、宗、を、勝、れ、事、を、名、を、し、

長、下、け、流、し、其、人、を、似、れ、し、正、宗、と、名、を、し、それ、を、今、も、九、代
と、名、を、し、先、祖、政、宗、出、陣、の、折、に、屋、代、時、子、陣、を、四、山、と、詠、
朝、霧、の、見、景、と、白、白、な、れ、山、家、を、名、と、し、

山、間、の、西、路、を、ま、り、河、を、似、れ、浪、を、名、を、し、ま、り、風、の、音
又、北、越、を、折、つ、ま、あ、り、西、王、精、も、名、を、し、賊、の、家、を、似、れ、
詠、多、く、入、表、れ、り、此、山、家、を、名、と、し、

中、に、九、折、の、路、を、ま、り、雪、子、津、の、道、を、山、里
此、二、首、の、歌、後、花、蘭、院、勅、撰、新、讀、古、今、集、入、り、し、と、り、又、世、後
都、に、上、り、し、名、を、名、と、し、

世、後、永、二、年、の、事、を、其、頃、将、軍、義、満、が、此、詠、歌、政、宗、の
嫡、子、兵、部、大、輔、氏、宗、と、賜、り、

武、士、の、跡、を、名、を、し、名、を、名、を、し、名、を、名、を、し、
又、御、追、善、し、紺、紙、金、泥、の、法、華、經、を、賜、り、

朽々なるも元言を承りて法を以て治めり
因氏宗ヲ稱する成宗文明十五年義政將軍の時上洛して
下向の時今存跡あり洛陽を以て居りて
都なる名残を譲と云ふは或る説と此皇の神と
と云ふなり朽々たるものありて或るを以て
尚後と云ふなり

諸國守人窪内と云ふ人負

村山守兵衛

我前國先方之國守破くは後

長元末に美長子加村守人石黒守右衛門

天正年中村山守人美長子加村守人石黒守右衛門

村山守兵衛

任職先方之國守破くは後

横崎伊豆

我後守人又ハ横崎守人祖又

和氣守盛長五年の事山北平鹿郡に來り

法部勝左衛門

會津守人美長殿守人同十原

と云ふ事

石山傳助

仙北先方横手守事

能く守治左衛門

備前守先方守喜多殿守人同十原

手の平七人 和波屋人 村崎 一 足手 佐長 勤 總
回道 あり 小波 あり 源 あり 尾 あり 何 處 廣 長
五年の昔 平 仙 北 あり あり

成瀬 七 堂 門 備 前 守 三 田 磨 石 中 細 守 石
山 近 石 元 三 百 石 高 人 三 三 子 壹 崎 守 一 燈 光

井 口 五 郎 兵 衛 少 中 井 口 先 方 園 々 急 下 り 赤 丸

同 重 兵 衛 古 同 家 越 前 小 平 屋 敷 三 依 三 備 前

年 三 十 五

中 井 口 守 一 慶 長 十 年 の 冬 同 々 急 下 り 湯 行 難

赤 澤 藤 堂 門 同 別 本 石 赤 底

太 田 六 太 夫 定 五 備 前

井 川 恒 高 宗 三 同 家 根 兼 丸 是 根 兼

年 の 元 諸 國 出 有 権 行 一 七 國 々 堂
下 井 川 恒 高 三 年 也

源 左 衛 門 信 州 守 一 年 也 勝 兵 衛

出生 常陸 能 登 三 法 名 海 心 堂 也

中 島 太 五 郎

同 家 戒 名 高 心 禪 堂 門

北 條 三 郎 兵 衛 常 因 雲 丹

奥 與 市 雲 丹

新 山 庄 守 門 雲 丹 早 通 七 名 守 也

中山 大 守 守 門 守 門

破損あり

西中角右門

同

無森又左門

仙北定方先方同其康六卿

大坂首高名同因獄慶長八年湯
澤まうら死

上杉当主三郎

會津先方米津と証也

明知十五郎

大坂居の時二孫藏し

右打七郎

大坂居の時十三歳之

戸部九郎

國魚時十六歳大坂降と云三歳

最上定方出生信州又三郎左門氏直讓
廿大坂討北祖文朝左門尾州山吉寺城之
放驗りし事也
今川吉元公二十八條の西大徳書し

○本町千葉九郎右門家藏

○平氏正統の家系譜ありその巻七事

千時延暦三年千葉五郎平氏逆

桓武天皇十五代常重羽州仙北千葉初之

千葉大學助平重房

○千葉大學助平常房一男千葉六郎三郎

二女子石田平八郎室之(三巻三) 三男彦作(四男彦平)

五季善三女(二七男)との唐公(おてう)

○千葉六郎三郎子女子三人一なり二二男三三女二

千葉大學助平常房

千時寛承元年乙卯月十五日千葉六郎三郎平常之

と名存す

○本町 石河新兵衛 家藏

○三社託宣 一軸 土肥氏 勇力信玄 木印

と云ふは是増田の城主の真翰なりと云ふ

○雄勝郡八面村の高橋平左衛門家藏 杉田新兵衛と云

ふは三社の託宣なり杉田氏の土肥勇信の師なりと云

○同 同 家藏

○草書にて龍形龍字の奇あり 光明菩薩と云ふ

光永の字あり 鈍海和尚と云ふ

平慶長 二井田色 山内孫右衛門家藏

○五圖

○信若増田是龍從降倉山下名之初は澤田友

土肥山内の人を下つての御陰謀代お供と云

御為事案は此一敷南不方より退轉志也

○折次者草帯 文是御不并 毒折枝也 左奥

介又一世の折良抄如の澤内 右奥 山内駕輿下

為事と云ふ自前代をたてたるの如し也

元龜三年 壬申 二月 吉日

○藤原朝臣 山内

須茂三右衛門尉 光實

破損あり

任之
元龜三年 壬申 二春の吉日

世家八幡宮の夢想より陣中のみ金倉の
高月樂を兜の鉢に嫌なり今も世に嫁女
伝えれありを神妙の音節樂と云ふ
又九郎判官の母君と云ひし事
十二歳の等しく一巻あり奉りし事
此事日記に云ふ事ありし事ありし事
童の時世ありし事ありし事

南朝幸号 建武二 興國七 正平 廿四 建徳二

文中九 凡 五十六年

うる人 倭名勅小舎とあり 金倉の氏之 又九郎判官の
鑲とあり 又鏡とあり 興國の事あり 説文に鼎を三
足而目と云ふ 志摩十國伊雜宮の由緒あり 近き事
正興石從鼎を一能とあり 朝聖念載の辰州の鼎足石の類
ぬきし 延喜式に母貝書とあり 平徳本を以て類とあり
鹽田書と書とあり 五文とあり 思ふ事あり ことあり ことあり
子にたしむ 波とあり 事あり 事あり 事あり 事あり 事あり
ぬきし 俗に懐年の事とあり ぬきし 大从皇の事あり
西の事あり 袖の事あり 事あり 事あり 事あり 事あり
ぬきし 泥濘とあり 史に澤塗とあり ぬきし 今も前事あり 常
に詞に關西とあり 事あり 事あり 事あり 事あり 事あり 事あり
事あり 事あり 事あり 事あり 事あり 事あり 事あり 事あり
たむ 和名抄小抄とあり 改元録申本也 字亦佳 事あり 事あり 事あり

めふむむに なる年半一冊と云ふは かくれんて かくれんて かくれんて
置利等の字ありあり 又手回しあること 同知こと 又天
多むりりして 天海の字ありあり 新撰の字ありあり 又天
多むりりと思ふなり 俗よたんとあること 新撰の字ありあり

○ののり 雲之涌と云 仙洞親王攝關の袍の文と云
宇治の政子姫と云 立涌雲も見申 龍騰之涌より 杉友浦の
菊之涌より 類聚雜書より 建涌雲透極よ

○久良 座よりあり 東屋の文あり 倉庫も座と成同 物
置より 園より 靴と座より 後靴 唐靴 和靴 結靴
鏡靴 木干靴 張靴 等あり 兼光記 小鈴唐靴と云物も
○新撰 字鏡 枕と来とあり 倭字より 傳名抄 小靴 却と云
鞆靴 ころも 排靴 肉を切きと云と云 伊勢靴 伊勢守
平貞継より 貞継 大坪道禪より 伊守 伊守
ひと云 俗語 座の文より 座もより

○くら 舊書記 水母目なり 古語 水母目なり 又暗き夏なり

○水之び水地之食へる節あり色之びと字皆毒なり丹後宮津
 の水味酸なり其食用とせしが唐之びと柳くはれ肥前
 唐之びと江古と云ふ亦肉厚し 文定、水母目蝦一肉あり
 海月ハ蛤類と云ふ即海鏡ハ七五三五三ハ其ノ食
 此物と身一と云ふハ邦を天地の始と云ふ魚ノ名あり此
 魚妙なり

○クモノミ 本、毗那夜伽譯孫障碍神也。如來其非
 鹿乱荒神。忿怒電神と荒神と稱し身之れハ佛説ハ
 引取ルルハ三身ト三寶荒神ト云其説ハ元障礙縁也
 俗言荒神と荒神と稱し身之れハ佛説ハ三身ト云

○折州勝尾寺の表神和州其荒神なり云云其表神の如し

○久乃 悔也日本紀万葉集に云くやのゆえよそくさけり又
 の八千度なり云くは略し反ゆに祝詞に悔は見ゆと
 思ふは先づぬと云ふ。後悔をいふに謂ふ。後悔ハ
 字詩に呂南ヲ見ゆ○人之所潰と身之れ及ゆと云ふ事也
 人むと云ふ

○くハ 倭馬樂ハ是の津原抄ハ云くハハ彼津谷津の
 探湯ハ云くハハ古事記ハ秋訶ハ云くハハ日本紀ハ
 探湯ハ云くハハ

○こハ 金ハ云くハハ黄ハ云くハハ俗言金ハ音ハ去ハ判也。本草ハ
 波斯紫麻也金東夷青金也日本書紀ハ云くハハ世に金
 云くハハ孔融ハ聖人優者論ハ云くハハ金之穉者名曰紫麻猶金之有

聖王と云々埃裏抄須弥山頂の閻浮樹の蔭落ちて金と多のぼり
 閻浮檀金と云々千五百集十とあり金御代云々元来多
 云々山千二〇〇〇とあり續日本紀陸奥國始て黄金と云々百
 西貢也事延喜式に陸奥より毎年砂金三百両云々百
 神代千田郡黄金山神社と云々金養山以名云々金華山木精
 の太云々小なるものなる仙華事陸子昂が春日合云々金華觀詩小
 白玉仙華古と云々千〇延喜式に下野國より毎年砂金百十兩
 鍊金八十兩云々貞世に云々勝實の初駱多胡圃の瀆より出云々
 要長七以上石見伊三南部より出てもつろ云々云々依馬より金
 云々事云々拾遺云々云々云々〇〇〇〇百脈根云々云々大和の事
 峯山云々云々も黄金のりりりり拾遺了見云々

〇〇〇〇〇〇 視告朔と二文字より視告朔と云々も云々
 公事根源を見え云々事中之事秋合也

論語告朔之饋美也云々

〇〇〇〇〇〇 懐ちめくの義云々学花物語より云々云々
 事めき乃と云々と見え花葉紙にあり云々此れ障子紙とも云々
 〇〇〇〇〇〇 又々云々歴代日記にあり云々云々
 〇〇〇〇〇〇 新撰字鏡に云々云々云々

〇〇〇〇〇〇 東坡語云々氷蠶虫不知冬大穽不知暑云々
 〇〇〇〇〇〇 云々云々馬と云々伏兔と騎着甲の向云々云々

〇〇〇〇〇〇 似合と云々云々云々云々
 〇〇〇〇〇〇 子安友成の事云々云々文云々在字云々用又論語云々有款
 我哉と云々云々云々云々云々

年中行事に神樂あり。庭あり始と朝倉其駒子と云々。此皆神樂の事。
○今婚礼出興の時。其家門戸を庭燈と諺く。是は送葬に准だ。此日
非勿之し。北史に我邦の風俗と記して婦人夫家必先踏。夫乃與夫相見
と見を了。遺風あり。

○こま。日本紀に王とらあり。又こまありとも。又えり。昔の
王を訓せり。杜氏通典に百濟王。号放羅瑕百姓呼捷吉と夏
言並王也と見えり。

○こま。舟と云々。漕と云々の。百条舟。橘定と云々。字多。漕と云々の。
進舟也と見えり。又水手と云々の。漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。
漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。
漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。漕と云々の。

○こま。居士の禮の王際小坐と注す。謂道誓處士也と見え。處宗
同じと隱者の稱く。室の政和中道家の官位と定めり。居士を
從七の官より佛者に。家事と見え。在官の。稱く。居士を
法華指嚴の疏を。所教典雅の言と談むる者と云々。位。居士を
と云々。今顯官の。大居士と稱する。居士と云々の。居士と云々の。
の時と云々の。居士と云々の。居士と云々の。居士と云々の。居士と云々の。

○こま。俗と云々の。こまと云々の。小枝の。或。居士と云々の。
居士と云々の。居士と云々の。居士と云々の。居士と云々の。居士と云々の。
居士と云々の。居士と云々の。居士と云々の。居士と云々の。居士と云々の。

○こま。元弘建武の。比。大長刀。小長刀。居士と云々の。居士と云々の。

○二。瘴きの種をとりしとそをとりてそをきくは
 味のひともあつたり此の語格とて下摺巖峰の思顯懸産
 足心酸濃とて文なり 悲哀此事不酸鼻とてこそくやとや
 中尾にせしむるも 足心酸濃の甚くして尻骨もるをこそ
 ○三。保良の天狗とて又まづひこむるもなり 木魂のそ
 彭侯是也傷名抄に之選の木魁因典の樹神とて延喜式に
 木霊とて云々 顯照山名のそなり

○三。や

農の長^三庄と稱むる在司花官の遺名とて治平路村
 長明律の管首仕人里正なり

界尺の常規とて有り 徳千うとて 加賀自俗は根
 板のそ片を引るといふも 鄙俗は板とて常考あり

唱門師とて今朝家の左義長土用水合を勤 後二水記
 浴外有唱門村とてあり 金銀打者とて

○二。や

高くなり 明衡往來に石塔郷良事 二月石塔之功徳忠業
 無量也とて今座頭小遺とて二月六月東福寺に於て
 雨夜の室子の法事とて此後四條河原小出て石とて塔とて
 香花を供養なり 此の神は毎夜の白王の光孝天皇の御子なり 明
 徳の御子なり 世の御子なり 三田とて云く 延喜式に白王とて
 唯神石式極多 國丹坐那の雨夜神社あり 今世

左の序の内典は多寶塔石塔沙塔泥塔等ありて近江吉備出
郡石塔寺の事拾芥抄所平盛衰記等ありて

名の和祥々々々々今之若松と唱へ世を白山社ありて今
關白村の近なるそむ多々白幡の祖ありて不之を此の藤
あり世に一房採てまた里より名を倉の倉ありて
ありて神々々々折つる前も返て日ありて倉跡ありて

○上瀬口 館ヶ岬 ○石神 今田神 五郎兵衛南無と名

○宗本塚 宗本千由氏隠居名 経緯の傍子埋むべし

遺言小任せ元禄十六年癸未十月廿四日葬ぬと下其後本町

千田彦室の時ありて法齋

○本原 ○廣町 明跡 ○暖屋 ○燈蓋又柳

○古名跡

○道中村 古城の北 八木邑道の傍に在り ありて雪吹路

ふきや

菅田村八

踏進ひてあぬがとあといひ由りやう人の出来事とあふ事
申と道多しとていひあぬまふさき夜かきまはれ事あり
まふゆり人あふ世柳の人とあふて左送甘ふさといひ
誰いふや送柳の名ありとて詠りて瘡柳あつて唱りて
やふ事とおと人あふは事とて

○渡邊柳と田所以南裡田の中いへ渡邊集といふ
古塚まほひあ柳ありし近きと其柳に人憶りありし
人の塚ありむせとて人といふ

○大坊柳を古館の坊に在りし今を移すその傳
いふあふらん大坊といふ人の塚やゆふあ柳あり
を内田月山の別當の祖とて古伝いふ事あるは似たり

○百川

秋田郡雄麻浦子百川と村あり大和路といふ名
ありし神皇正統記の第廿三代淳和天皇
西院の帝とも中孫桓武第三子御母を贈皇大
后藤原旅子贈太政大臣百川の女といふ

土壽慶又

土壽慶二年といふ事の跡ある大船若経仙北郡金原
八幡宮神藏あり世土壽慶南於北郡といふ
むりといふお敷よつてもありし其といふ名も
土壽慶の前まは貞治ありてを編むといふ
嘉慶といふ事ありま土壽と嘉といふ事あり
代後醍醐天皇諱を尊徳後宮女弟といふ事あり淡路

云々舊都に戊寅の年の冬改元して曆徳とをいふ言や
宮に本延元の名を給ひ西と東の別ありと云ひ
あはれりとあり多かれと世國を倒れさせしと云ひ
あはれりや大日本國根元本より皇都に内侍所も
沖垂も言やありと云ひつくりはありと云ひ
八月廿二日ありと云ひ後者もわたりと云ひ
すはめと云ひと云ひ

地藏順禮記

地藏菩薩の功德の事々地蔵談歎磧石集宇治拾遺也
其見録もてと云ふも記す人の見るところ也秋田の
むらき地蔵めぐりといふ書ありと云ひ
京都の寺に地蔵大士といふの寺ありと云ひ
世の中よりあると云ひ地蔵を供へると云ひ
其地蔵をめぐると云ひ明和をめぐると云ひ
めづりたりと云ひ
秋八月廿四日ありと云ひ山本郡河戸川の大塚寺尊天作
りてありと云ひ其地蔵大士の像ありと云ひ
ありと云ひ其の事と云ひめづりたりと云ひ
尊像ありと云ひ

治中二十四番地藏本願禮亡墓一也久留寺
壹番壬生寺住羅陀山地為全保戸野愛宕山
云云寶貝寺

二番萬壽寺坐余地藏座像

聲射寺

三番光林寺

未迎寺

四番勸學寺

義峯山鱗勝院

書洞

○八津木下唐祠官遠藤氏系譜

大職冠鐘足云六世藤原俊唐五男造藤九郎勝朝
上祖天長元年二月十九日七歲卒

二代友能 三代友安 四代勝廣 五代勝吉 六代勝吉

官侍上云内殿三扇為天曆三年十月油利之四郎也表之

勝宗之敵油利侍七時也計也吉茂 八代重親

九代茂久 吉茂孫号右近正吉郎二男正茂即大友後

子之康和元巳知年古田山官侍 芳賀 鈴木 相多 共野

宇垣保太 遠辰 久名 平頼 依木 世平 今 佐間 當麻

板苗 小友 上瀧 星山 星宮 是八人 四河 加執 遠辰

大友之依背下知山中野初依之情守軍武則云和談云

鎮^ノ大治^ノ年己酉有土行年七十^ノ代親克

宮傳^ノ文治^ノ年平永^ノ入^ノ當山^ノ出^ノ辨^ノ代親正工代

親正 長久孫^ノ宮傳^ノ家^ノ宮^ノ子^ノの^ノ美^ノ子^ノ

十代正廣 号^ノ那^ノ水^ノ依^ノ親^ノ正^ノ無^ノ子^ノ平^ノ原^ノ乃^ノ久^ノ保^ノ自^ノ延^ノ

小銘氏 德治三年丁未二月三日百二歳^ノ死

十一代廣次 十代勝正 十代勝行 十一代正反

十七代正則 十六代正保 正則子河對馬

明應年中油利忠八^ノ抄^ノ中^ノ抄^ノ合^ノ我^ノ之^ノ時^ノ中^ノ抄^ノ寺^ノ爲^ノ之^ノ及^ノ高^ノ石^ノ

永正七年七月十日^ノ抄^ノ中^ノ抄^ノ合^ノ我^ノ之^ノ時^ノ中^ノ抄^ノ寺^ノ爲^ノ之^ノ及^ノ高^ノ石^ノ

女^ノ始^ノ仙^ノ北^ノ初^ノ日^ノ六^ノ部^ノ順^ノ見^ノ不^ノ天文二年癸巳七月

十九代正勝 永保十二年^ノ抄^ノ中^ノ抄^ノ合^ノ我^ノ之^ノ時^ノ中^ノ抄^ノ寺^ノ爲^ノ之^ノ及^ノ高^ノ石^ノ
時^ノ抄^ノ中^ノ抄^ノ合^ノ我^ノ之^ノ時^ノ中^ノ抄^ノ寺^ノ爲^ノ之^ノ及^ノ高^ノ石^ノ
三月七日^ノ抄^ノ中^ノ抄^ノ合^ノ我^ノ之^ノ時^ノ中^ノ抄^ノ寺^ノ爲^ノ之^ノ及^ノ高^ノ石^ノ

二十代永久 廿一代廣久 廿二代俊久 廿三代勝定

廿四代盛名 廿五代勝久 廿六代勝共 廿七代勝重

廿八代勝正 廿九代勝維 三十代勝利 卅一代勝徳

卅二代^ノ抄^ノ中^ノ抄^ノ合^ノ我^ノ之^ノ時^ノ中^ノ抄^ノ寺^ノ爲^ノ之^ノ及^ノ高^ノ石^ノ

神事
の
し
る
事

人ごころ

世に於ては神と多し佛といひわねを今も詳れざるの言
 其言ありては社と佛とをそのかほらふ休してを
 ぬらうく人ごころ多しなりといふは又國の、も佛殿をいふ
 寺のなるは塔大かま克又けふも寺のまよりま
 やまうしまうづる事わあし何のな、神のまあるはあま
 木あうに林とて張はしとありて夜にままうのうじの柏家
 とありてまの一度の神事といふは人まうづる事あま
 いまうづるもまうづる物ありて七の巻の神事といふは
 後への物休らざる事といふはまうづるは世中小願の
 いふまうづるは神社のまうづるをいふはまうづるは神の
 ことまうづるは今の世に神事といふはまうづるは

中之所のみれ世の... 治まされぬ... 今此世の
 人を... 皇國の... 神事... 古の世の... 神事...
 又... 世の... 人... 神... 世の...
 悲し... 今此世の... 神の...
 今此世の... 神の... 世の...
 今此世の... 神の... 世の...
 今此世の... 神の... 世の...
 今此世の... 神の... 世の...
 今此世の... 神の... 世の...

十訓抄九冊建長四年十月旬

林下秘鈔上中下 本 秘中秘三卷

順徳院御抄 正和五年五月十日 中出 兼徳御本 卷五 可取

官職知要

新六帖

の 越の路乃らうられ... 官職知要

夫木

さやせの... 官職知要

二二四

力三奇女

春高國三頭山長福寺在赤坂驛鎮西沱寺鎮三石寺
 在宮地山之麓如郎石
 同國力孫山舌根寺在財賀村力孫苑辰辰此夫大
 江定基道也名寂照法師而後渡天竺登清雲山
 晉力珠現文殊菩薩

柿

似柿ミタリガキ 伽羅柿一各名 圓座柿 筆柿 樹練柿
 田倉柿 燒柿ツルミヤキ 白柿 柿餅 柿花
 胡蘆柿一名 即乾柿大如頭在
 鳥柿豆柿 餅柿餅柿 餅柿餅柿 餅柿餅柿
 着安集 山柿 山柿 山柿 山柿 山柿 山柿 山柿 山柿

為相前

七十五の九根の管中過る管成りありと云々
 加こりやあべ〜 〇〇〇〇〇〇〇〇
 百本の数のよき〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 今世の世をばとてあまのひらひらあまの事や
 世をばとていふあまのひらひらあまの事や
 今の世を古んといふ事初心のやとていふ事
 まもあまの事やとていふ事初心のやとていふ事
 ろる事凡のこまをいふ事初心のやとていふ事
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 中と政十年十月の廿五の日の卯へあまの事

本所領目石部 石炭 雜石 煤炭 石墨
 鐵岩 烏金石 焦石 可成る石
 氣味 甘奉 濕有 毒母 等

平鹿郡

比良加も舊蝦夷遺語の比琉如と云。誰りも傳ふる事
 秋田郡井川庄の書鹿野藤緒傳といふなり。そとく比琉如を
 良といふ夷等が方言なり。陸奥國津輕五郡の中にも平鹿
 ある。その津輕の五郡といふは、麻郡田舎郡入馬郡花輪郡
 平鹿郡平鹿郡なり。今も平鹿郡といふは
 庄なり。似やをせられたる。倭名抄云。國府在平鹿郡。此良
 少見なり。甲の考す。平鹿を平鹿と云。往古於是陶者あり。
 そと工員タテノツクリの地也。名を負ふの書紀神武卷。平鹿世云
 比羅介と云。甲の神道名目抄。平賀神事神事。毎
 二月祈年祭。土月新嘗祭。度世神事。春二月朔。冬

土月初子日スミジノヒ任吉神宮和州の香山此土を取来て平寛

里人世記の故事より。天平寛と造り。今其形を造り。天朝々の
御饌調進の土聖と造り。○洪水也。豊受宮正殿の下。天平寛
漂々如事。鳥羽院の時。百練抄に見え。○任吉神事。頼朝
世孫あり。平寛より出さる事。○ひらの書。出羽平鹿郡より
出さる鷹と云ふ。新六帖にもあり。○平賀氏東鑑に見ゆ。元弘
護良親王に從て。十津川に匿ひ。赤松律師則祐。村上義光。平賀三
郎也。○三條より。○古事記傳。八咫良良。條。八十數の
云云。比良良。地王。地王。古事記。平賀のり。や。や。や。
もそれ。なり。平鹿。と。古郡あり。續紀廿二
四十七代淡路廢帝の。天平寶字三年。己丑。勅造。陸奥國
桃生城。出羽國雄勝城。所。役。郡。司。軍。毅。鎮。兵。馬。子。合。八。千。百。八。十。
從去。春。月。至。于。秋。季。既。離。郷。土。不。顧。産。業。朕。每。念。茲。情。深。懼。

平賀新寺

宣免今幸所貢人身學統始置出羽國雄勝平鹿二郡
 廿七桓武天皇のみろた延暦元年六月丙午崩出羽國言寶龜
 土年雄勝平鹿二郡百姓為賊所略各失本業郡弊已甚
 更建郡府招集散民雖給口田未得休息因茲不堪備進
 調庸切主諸蒙給優復時自弊民勒給復三年云云
 見元德名抄平鹿郡山川大井邑知見元德

文政七年()の秋()の八月

上江真澄

招集散民と云ふ事

母宇治の橋姫と云ふ愛姫義と云ふりやある
 皇朝の日本紀萬葉集小多し愛字はほきとよき
 愛事やいづれと云ふもいづれと云ふも細く略す
 古事記にききやいづれと云ふもいづれと云ふも
 けいあを愛姫と云ふもいづれと云ふも
 鬼路橋より云々ありかゝるあり
 衣通姫と云ふ事姫と云ふもいづれと云ふも
 山名と云ふ事いづれと云ふもいづれと云ふも
 風通も日通も蚊通もいづれと云ふも
 かゝる石炭と云ふ事いづれと云ふもいづれと云ふも
 品類と云ふ事いづれと云ふもいづれと云ふも
 何れもいづれと云ふ事いづれと云ふもいづれと云ふも
 あらまゝ靈異記と云ふ事いづれと云ふもいづれと云ふも

晋豫讓が吞して啞したる是ことなり○延喜式に荒岩
和炭あり是々今も堅炭焼炭あり○新撰字鏡に
箆をゆきまの音とあり炭箆とほなり

○南間川 加久麻村 賀波

加久麻の河能河隈あり名も草小鳳尾蕉と鬼抄羅小
類にあり馬小騎鏡とて打やや入る河有騎馬
尾

一、向子事... 大権の権を... 五城目兵庫... 其項南都... 子細有... 夫令也... 元来至... 從住進... 小某不... 於... 内...

法師も... 〇清水山源昌寺... 和尚... 杉群の地... 井... 観音...

松尾の忠尚の御説に於ては
此の書に於ては
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは

松尾の忠尚の御説に於ては
此の書に於ては
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは

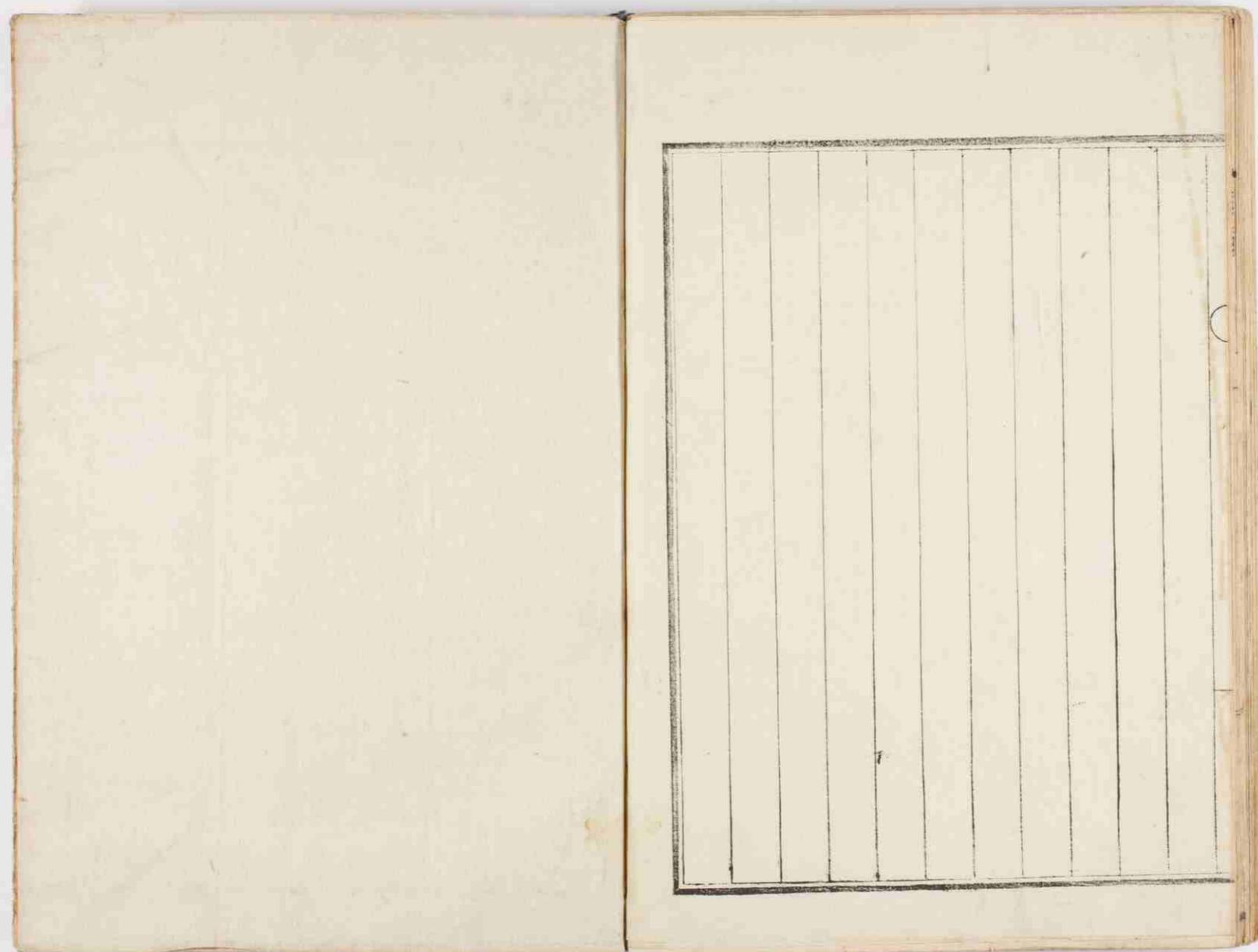
松尾の忠尚の御説に於ては
此の書に於ては
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは

松尾の忠尚の御説に於ては
此の書に於ては
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは
一書一巻を以てして其の
大なるものなるは

世せしきいづきおれらよめ うちうひのちちもあふじらひのちちの
 いらふあはれはあまきの山政をいづ預けりまれし返し
 言叶のあはれをもあつしやうらうらもほほあまきを秋ありとも
 せくらもめ せいれいさく ともうらほらなりまの秋にまのて君はせ返
 君のきみうらまの言叶の秋にむうらまをえつともあつしとあ
 ちのあつし 岩谷宗賀のつやく 君やうらうらまをわくこつあ
 うらまをうらうらまをいづるまをうらまをいづるまを返し
 ち侍のゆのまゆこと君はつるまをうらまをうらまをうらまを
 まうらまをうらまをうらまをうらまをうらまをうらまをうらまを
 あらうらまをうらまをうらまをうらまをうらまをうらまをうらまを
 うらまをうらまをうらまをうらまをうらまをうらまをうらまを
 はうらまをうらまをうらまをうらまをうらまをうらまをうらまを

○上津野の花

夜與比ばうり 秋田郡十二懸郷に米吹谷氏のりふ三四日ありはあつし
 も見ゆし今にのれ 世五百鹿郡のりふは折橋關ありはあつし
 ちよ雪をまていづのりふはあつし 三折山の麓ありはあつし
 君や跡も隙さうわさうはさ垣のりふはあつし 田にありぬ
 二三戸ありも残りぬ 今に人の十二懸うらまをうらまをうらまを
 折橋といふ古き地を立關屋ありは折橋關とい其名今もあつし
 龍とわくわく折橋のちちのりふはあつし
 向の時知りぬし ち平きのあつしをうらまをうらまをうらまをうらまを
 ちよ山にありぬし 秋田氏の舊臣朝光を攻るなり 一橋の大將を
 浅利伯耆同法及入道 同藤馬元 花園因幡三屋 民部 曲淵源助 澤尻冬郎
 別所三郎 ちちのりふはあつし 別所をうらまをうらまをうらまをうらまを



61/61

破損あり

